未来を変える島の学校

あなたは
三年間を
どう使うか

自然と
島前と
毅然と

そこにある、
踏み込んで、
失敗しても、

島根県立隠岐島前高校学校案内 2026

序章

隠岐諸島・島前。本土からフェリーで三時間、海と緑に囲まれたこの島には不思議な引力がある。全国から、そして島の中から吸い寄せられるように集まった若者たち。ここは迷い、失敗することを称え合う特別な場所。正解のない地図を握りしめ、彼らは自分だけの航路を見つける旅に出た。

第一章　ひらく

「なんで制服を着ないといけないんですか?」

ハルトは学校の理不尽なルールに何度も噛みつく「めんどくさい生徒」だった。島の自由な空気に憧れて入学したのに、ここにも話しが通じない大人がいる。そんな風に思っていた。

逃げ場は、学校の外にあった。週に一度、ハルトは福祉施設「ひまわり」に通った。最初は「どこから来たの?」と一日に六回も聞かれた。けれど、通い続けるうちに、その声は「あら、また来たね」に変わった。おばあちゃんたちから聞く、戦争の話、昔の島の暮らし。それは、教科書には載っていない、生きた言葉だった。

副寮長になったハルトは、三燈寮を地域に開こうと「ひまわり」と寮をつなぐイベントを企画した。何度も地域へ足を運び、寮生たちと自分たちがこの地域にいる意味を語り合った。

イベント当日、ハルトの目の前には、地域の子どもが走り回り、ひまわりで会うおばあちゃんがコーヒーを片手にくつろいでいる風景があった。同級生が自分で育てた野菜を地域の人たちに販売している。笑顔、笑い声、飛び交う言葉のキャッチボール。

「俺がやりたかったのは、これなんだ」

ハルトは静かにこう思った。大人が用意したレールじゃない、自分で切り拓いた道。見たかった景色を自分たちで作りあげた喜びが寮の中にあふれていた。

第二章　たがやす

ヒマリのスニーカーにはいつも土がついていた。

島に求めたのは教科書の知識じゃない。ヒマリは「現場」が欲しかった。寮の畑、地域の畑、そして個人で借りた小さな畑。彼女の三年間は、いつだってこの畑の土と共にあった。

三つの畑を駆け回る日々がスタートした。雑草を取り、竹を乳酸発酵させて土に混ぜる。泥にまみれる毎日。自分だけが必死で、気づけば最初は十人以上いた仲間が、一人また一人と去っていった。

「計画性がないって、そんなこと分かってるよ……」

仲間から飛んできた言葉を思い出すと涙が出る。ヒマリは泥のついた手で顔を拭った。

大学では野生のイネを研究しようと決めた。農作物を育てることの厳しさを知ったから、次はそれを助ける取り組みがしたい。計画通りにいかなかった土作りも、思うようにいかなかったチーム運営も、すべて「現場」でしか得られなかった経験だ。

地域の畑からの帰り道に同級生とすれ違う。「ねえ、今度の部活の遠征なんだけどさ！」——静かな夜に響く彼女の弾んだ声がヒマリの足取りを少し軽くした。

第三章　まざる

高校に向かう急な坂道を、ヒナは立ち漕ぎで進む。島内生の彼女にとって、この道は幼少期からの日常だ。けれど、高校に入ってからその景色は一変した。

「おはよ！今日の部活、地域イベントで行けないかも」

そう声をかけてきたのは、東京から「島留学生」としてやってきたバレー部の友人だ。彼女たちの話す中学の思い出や見たこともない街の話。十五人しかいなかった中学時代には想像もできなかった「異文化」が、今はすぐ隣にある。

夕暮れ時、オレンジ色に染まる体育館でボールを片付ける。

「ねえ、やっぱり海外研修行きたかったよね」

ヒナはぽつりと呟いた。コロナ禍で海外研修は中止、行先は国内に変わった。期待していた未来とは違う、思い通りにいかない日々を、それでも「その中でどう楽しむか」に切り替えて過ごしてきた。

海外に行くことを憧れで終わらせたくない。ヒナは卒業したら留学すると心に決めている。「世界中に友だちがほしい」根拠のない自信ではない。島内生、島外生と共に肩を並べ分け隔てなく笑い合った三年間が、彼女の夢をしっかりと支えていた。

体育館の中からはまだバッシュの鋭い音が響いている。

「もう一本！」

新設されたバスケ部の一期生。自分は海の外へ、彼らはこの島で新しい歴史を作る道へ。

遠ざかるドリブルの音を背に、ヒナはいつもの坂道へ力強くペダルを漕ぎ出した。

第四章　つなぐ

「島が好きなんです。それと、バスケを続けたかった。理由はそれだけでした」
ソウタは西ノ島町で生まれ育ち、新設されたバスケ部の「一期生」になった。
バスケ部の初練習は、物置と化した部室の片付け。経験者はソウタを含めてたった二人。長身で強面の顧問の先生が正直最初は怖かった。
「お前が点数を取ってこい」
一年の時からエースを任され、プレッシャーに潰されそうな日もあった。でも、遠征の帰り道、移動の車の助手席で交わした先生との何気ない会話がソウタを支えてくれた。先生から一番怒られたけど、一番話しをしたのも自分だと思う。いつしか自分も「先生のような教員になりたい」と本気で思うようになった。
三年生の最後の試合に接戦で負けたことは今でも悔しい。でも次の年には後輩たちが新人戦で成果を上げてくれた。ああやっとチームになったな、そう感じた。
「運動部っていいよ。あんなに仲間と熱くなれる場所、他にないから」
放課後、体育館の鍵を開けながら入部希望の一年生と話す。ふと見上げると図書室の窓から海をじっと眺めている女子生徒がいた。彼女は静かに、けれどとても大事そうに一冊の本を胸に抱えていた。

第五章　みつめる

海が見える図書室のカウンター席は、アオイにとって唯一「息つぎ」ができる場所だった。

中学までは学力という物差しだけで測られる狭い箱の中にいた。そこから逃げるように直感だけでこの島に来た。入学前に感じていた「わからない未来」へのワクワクはいつしか「これでいいのか」という葛藤に変わっていた。

周りが地域へ飛び出し、探究活動に励む中、アオイは放課後になると先生のもとに通い、マンツーマンで古文や数式、英単語と向き合った。島前高校に来てまで勉強ばかり。そんな自分が時々ひどく格好悪く思えた。

それでも、授業中や放課後に自由に質問ができるようになると勉強が面白くなった。自分の中から自然と生まれてくる問いに真剣に向き合ってくれる先生たち。そんな時間の積み重ねがアオイの心を少しずつほぐしてくれた。

ここでは無理に誰かと同じにならなくていい。ただ勉強が好きでも、集団が苦手でも、受け入れてくれる。そう思えるようになった。

ふと図書室を見渡すと、熱心に草花の図鑑を眺めている先輩がいた。あんな風に夢中になれるものがあるの、うらやましいな。まだ少し胸がきゅっとするけれど、自分はこれでいいと同時に思えるアオイがいた。

第六章　めぐる

「西ノ島に面白い人がいるんだけど、会いに行かない？」
コーディネーターさんに声をかけられて飛び出した先には、ユウマの想像以上の学びが待っていた。
圧倒的な自然、多様な生き物、そして受け継がれてきた島の暮らし。海や山、島まるごとがユウマの学校になった。教科書にない「生きる知恵」を教えてもらうワクワクと、島の大人たちと過ごす何気ない時間の安心感がユウマの背中を押し続けた。
知りたいこと、やってみたいことが多すぎる。養蜂の技術、注連縄の作り方、語り継がれている民話、ビーチの清掃や隠岐の自然の素晴らしさを発信すること。高校三年間を自分なりに走りぬいたつもりだった。でも足りなかった。
「まだ、何も返せてないんですよ、この島に」
高校生活を振り返りながらユウマは少し悔しそうに笑った。自分に何ができるだろう―そう語るユウマの表情には島で出会った人たちの温かな眼差しが今も確かに寄り添っている。

終章

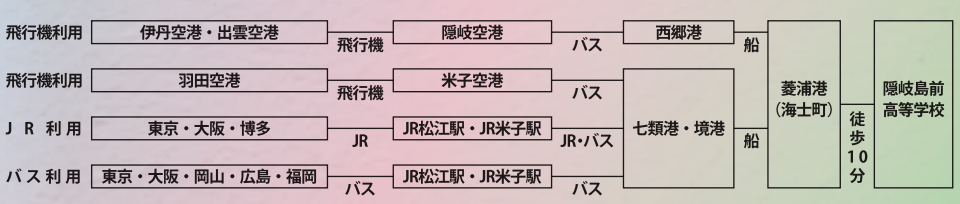
卒業。六人はそれぞれの船に乗り、それぞれの海へと漕ぎ出していく。世界への旅立ち、学問の扉、あるいは今までにない新しい挑戦へ。手にしたのは正解ではなく、選んだ道を正解にしていく強さだった。
さて、君はどんな航路を描くだろうか。空白の地図が君を待っている。

文章協同制作　隠岐島前高校卒業生

島のもんは
いつでもここで 待っとるよ

島前3島まるごと学校
島根県立隠岐島前高校

アクセス



島根県立隠岐島前高等学校（全日制普通科）
〒684-0404 島根県隠岐郡海士町福井1403
Tel 08514-2-0731　Fax 08514-2-0035

ホームページに最新情報を
掲載しています
https://www.dozen.ed.jp

※お問い合わせは、ホームページのフォームをご活用ください。※この学校案内は令和８年４月の状況をもとに作成しています。